# 神と自然

## ――自然をめぐる東洋と西洋の問題――

小畑　進

第一章　鈴木大拙のキリスト教評
(1)　千代女の〝朝顔〟論
(2)　〝朝顔に〟から〝朝顔や〟へ
(3)　千代女とテニスン
(4)　植村正久のワーズワース
第二章　友なる自然・敵なる自然
(1)　敵対力か友人伴侶か
(2)　つくられたるものたち
(3)　共にうめき共に望む
(4)　造化にしたがい〈芭蕉〉
(5)　日は上り、日は沈み
(6)　空の鳥・野の百合

第三章　人格神の恵みの世界

(1)　「日々是好日」観

(2)　〝おかげさまで〟考

(3)　〝釣瓶とらせて〟の境地

(4)　フランシスの賛歌

〈注〉

## 第一章　鈴木大拙のキリスト教評

鈴木大拙老漢は一九六六年(昭和四十一年)七月十二日早暁、急死されました。それも、まことに老人らしからぬ絞扼性腸閉塞でした。彼の学問、殊にその教説が全佛教を代表しているか否かは問題もあると思いますが、その九十五年にわたる生涯の長さと言い、東洋の宗教思想を西欧世界にひろめるための行動半径の広さと言い、その影響力は、とうてい象牙の塔の住人の及びもつかぬ大きさをもっております。その著作も、いわゆる学者的でなく、達人的で、一般にも多くの愛読者を有しています。しかも、佛教徒として欧米世界で活躍し、その夫人も英国人であったことからして、当然、キリスト教と佛教との対比を試み、その〝日本的霊性〟なる立場からする比較論、佛教のキリスト教に対する優越論は、手放しなほどの日本びいきですが、どうしてもとりあげておかねばならない一つでしょう。

### (1)　千代女の〝朝顔〟論

さて、大拙老がキリスト教と佛教との比較、ひいては、後者の前者に対する優越を説く際に、よく使われたのが、千代女の〝朝顔〟の俳句でした。

朝顔や釣瓶とられてもらひ水　　千代女

一九五九年六月のハワイ大学における第三回東西哲学者会議でも、八十九才の彼は、この〝朝顔や〟を巧みに英訳引用して、「禅とパラサイコロジー（超心理学）」を、二時間にわたって語り、最後には、西洋流の合理主義の論理だけでは、どうしても説明しがたいことが我れわれの人生にあることを強調して、そういう場合の禅者の解答はこうだとして、「喝！」と大声を発し、満場ハッと息をのんだということです。

この講演に対しては、「ワンダフル」という反響が多くありましたが、ニューヨーク大学のシドニー・フック教授は、「自分は今夜の話をナンセンスだと思う」と、語ったとも伝えられています[1]。私は、何かこのフック教授の「ナンセンス」なる言葉に心ひかれるものがあるのですが、それはそれとして、自然をめぐる大拙の佛基両教対比論を見て行くことにしましょう。

その〝朝顔や〟の一句について、大拙はどんな所感を有していたのでしょうか。次の「佛教の象徴主義」なる一文は、よくそれを物語っています。

象徴についての佛教的な見方を示す俳句を、もう一つ出そう。それは第十九世紀の一女流詩人が作ったもので、次のやうになっている。

朝顔や
釣瓶とられて
もらひ水

詩人が朝早く戸外の井戸から水を汲まうと出てみると、釣瓶は花咲く朝顔の蔓にからみつかれている。彼女は花の美しさに深く心を奪はれ、何をしに来たのかすっかり忘れてしまった。彼女はただ花の前にたたずむばかりであ

った。いわば恍惚忘我の境地から我に返ったとき、彼女の発しえた言葉は、『おお！朝顔よ！』だけであった。彼女は花を敍述してはいない。ただありのままに感嘆しただけである。どんなに深く、どんなに完全に心うたれたかを示すところの、その花の美しさ、その霊妙な美しさへの言及を、彼女は少しもやっていない。事実、彼女は全く花に魅了されてしまったのだ。彼女が花であり、花が彼女であった。両者は完全に一となり、彼女を彼女と認められなくなった。固定の意識を失ってしまったその瞬間から覚めたとき、彼女は始めて立ってその美しさをたたへる詩人ならば、『おお！朝顔よ！』とは決して叫ばなかったであろう。だが、自覚を取戻すや否や、それから来るすべての事が避けがたく継起し、彼女は突如、朝の臺所仕事に必要な水をもとめて井戸の側にいることを思ひ出した。そこで次の残り二行が生れたのである。

釣瓶とられて
もらひ水

特記すべきは、纏ひついている蔓を詩人がほどかうとはしなかったことである。そのつもりが彼女にあったなら、それは容易になされたであらう。朝顔といふものは、いためつけられずに、わけなくさうさせる花なのである。然し、明らかに、彼女は、自分の世俗的な手を花に触れさせたくなかった。愛情深くも、花をあるがままにまかせた。彼女は必要な水をもらひに隣家へ赴いた。釣瓶が花にとられたと彼女はいっている。眼前に見る事物の超絶的な美しさをけがすことについて、彼女が何の言及もしていない事実は、注意されてよい。釣瓶がとられたとだけいっているのは、いかにも女らしいやさしさと受動性のあらはれだ。

ここでふたたび吾々は何の象徴主義も無い事実を了悟する。なぜなら、詩人にとって、朝顔は美を象徴してはいない。それは美そのものである。それは美しいもの、或は価値あるものを指してはいない。それは価値そのものなのだ。朝顔以外に探し求めらるべき何の価値も無い。美は花の彼方に認めらるべき何ものかではない。それは、朝顔の中に象徴され又は具象化さるべき単なる観念ではない。朝顔が全部なのだ。吾々の感覚や理智が個々の対象として辨別するものをたよりに、詩人は美を認識したのではない。詩人は、その前にたたずんだときの朝顔以外に、

何の美をも知らぬ。花が美そのもの、詩人が美そのものなのだ。美は美そのもの、詩人が美そのものなのだ。美は美を認識し、美は美のうちに自己を見出す。吾々が美を剖割したり、美しい対象を見る人について語ったりしなければならないのは、人間的な感覚や理智の所為である。かういふ考へ方に執着するかぎり、象徴主義がつきまとふ。だが、佛教哲学はいはゆる感覚の対象によって迷はされないことを要求する。それは迷はされたが最後、実在とのつながりは断ち切られるであらう。……佛教哲学における象徴主義は、哲学者が一般にその名で了解しているものとは異なる内容を含意するといへよう②。

まことに、能弁なる風雅の心の説法と言うべきです！そして、「基督教と佛教」なる一文では、ついに、この〝朝顔〟の一句が基督教と佛教との比較論の題材となります。

加賀の千代女の句に、

朝顔や、釣瓶とられてもらひ水

といふのがある。第一句を普通に「朝顔に」とするが、それは間違ひで、「に」は「や」でなくてはならぬ。「に」にすると、この句に何らの意味も無い。千代女の恍惚として「美」の世界に吸ひ込まれた様子が少しも見えない。極めて通俗の十七字になってしまふ。

それで千代女は「や」の一字で自分と朝顔との圓融無礙底（えんゆうむげてい）をうたひだし、絶対美の世界から出ると、自分が井戸ばたに何しに立ったのかに気がつく。そこで「永遠」は「今時」に戻る、「時間」が這入（はい）って来る。「もらひ水」に出かけなくてはならぬ。歴史はここから始まる。

ここで特に留意したいのは、千代女が花に触（ふ）れなかったことである。テニスンのやうに垣根の花を摘（つみ）取って、こ

れを分析的にながめて、天地の秘密をそこからうかがひださうとしなかったことである。女性と男性との相違といへばいはれぬこともなからうが、私はむしろ東西思想の相違と見たい。そのままにしておくのが東洋である。これに手を加へ、力を加へ、薬を注ぎ、試験管に入れて、それからどうなると見てゆくのが西洋である。「美」に手を触れてはいけない。「美」は「聖」だ。

芭蕉の俳句などにいひしれぬ深さを示すものがある。作者自身この思想としての深さに自覚したかどうかは別問題として、その心理の奥にひそむものを、読者は各自に抉出(けつしゅつ)してみるべきであらう。

〈朝顔や〉に東洋底があり、テニスンの〈垣根の花〉に西洋底があるといってはどうか。、

基督教と佛教との相違にも何かこのやうなものが反映されているといへないかしらん。

そんなら、この二つの思想の「交流」なるものをどうすべきか、この問題は「時間」がおのづから解決するであらう。歴史の途上にある吾らとしては、この問題を虚心坦懐に提出して検討すればいい。そこにおのづからの『交流』があるであらう③。

### (2) 〝朝顔に〟から〝朝顔や〟へ

ところが、加賀の千代女(一七〇三〜一七七五)の〝朝顔〟の句は、はたして大拙老漢がしきりに強調しているように、〝朝顔や〟だったのでしょうか。むしろ、〝朝顔に〟だったのではないか。少なくとも、私が考証しえた限りでは、〝朝顔に〟だったようです。大拙自身、その六十才代の名著『禅と日本文化』中の「禅と俳句」の中では、やはり〝朝顔に〟としてあったのです。そして、こう言っています。

朝顔に
つるべとられて
貰ひ水

朝顔の句の作者は加賀の千代女（一七〇三～一七七五）であった。散文的な批評家の記すやうに、此女流詩人が朝顔の釣瓶に絡（から）んでいるのを見て水を貰ひにゆくのは不必要な業かもしれぬ。しかし、千代女の見方からすれば、彼女が朝早く近くの井戸から水を汲まうと出てきて、其花を見た時、それは美の体現であったに違ひない。今一人の平安朝の女詩人も夏の朝を挙げて日本の一年中でも最も爽快な時刻の一つにしているが実際そうである。そして、夏の早朝の雰囲気を一層生々させるものこそ咲き開く朝顔の花であるが、その麗しさがたった一ト朝しか続かないのも誠に之にふさわしい。それ故に、朝早く朝顔の花を見るのは、美そのものを、――かくも新鮮な、かくも心を恍惚たらしめる、かくも神聖にして近寄りがたい、神秘に充ちたる、神の手より来たまゝの最初の創作品を見ることである。どうして此女詩人が、彼女の地上の生存に関はる実用的な理由だけで、それに手を触れて動かし得ようか……④。

とは言え、千代女の原句が、大方の定説のように、〝朝顔に釣瓶とられて貰ひ水〟であったとしても、〝朝顔に〟では、あまりにも説明的で、「いわば風雅の何たるかを理智的に説明したやうな浅いところにとどまっている。随ってわざとらしい臭味すら感ぜられる⑤」（穎原（えいはら）退蔵）のであって、これを「や」に直し、「や」でなければならぬとしたところなどは、まことに同感で膝を打ちたくなります。

### (3)　千代女とテニスン

かくて、問題はキリスト教についてです。さきほど引用した「基督教と佛教」においては、

特に留意したいのは、千代女が花に触れなかったことである。テニスンのやうに垣根の花を摘取って、これを分析的にながめて、天地の秘密をそこからうかがひださうとしなかったことである。女性と男性との相違といへばいはれぬこともなからうが、私はむしろ東西思想の相違と見たい。そのままにしておくのが東洋である。これに手を

加へ、力を加へ、薬を注ぎ、試験管に入れて、それからどうなると見てゆくのが西洋である。美に手を触れてはいけない。「美」は「聖」だ。

とし、

〈朝顔や〉に東洋底があり、テニスンの〈垣根の花〉に西洋底があるといってはどうか。

となり、ついには、東洋底が佛教、西洋底が基督教と吹きかえられて、

基督教と佛教との相違にも何かこのやうなものが反映されているといへないかしらん。

と、もたれかかって行くのです。

この勢いによると、西洋、ひいては最も重大なことにキリスト教は、花を見れば「摘取り」、「手を加へ」、「薬を注ぎ」、「試験管に入れ」てしまうもののように印象づけられ、言うところの「美」にも、やたらに手を触れ、「美」は「聖」にあらずとでも言っているように印象づけられるという次第です。こうした《俗見》を裏がえすと、日本人の西洋科学に対する劣等感があらわれて来るように思われてならないのですが、その事はその事として、このナンセンスな論法を逆に日本に向けるとしたら、どうなりましょうか。西洋人たちが死せる石材をもって家を建てるのに対して、日本人、東洋人が生きている木を切り倒して家を建てたり、〝華道〟と称して、せっかく自然に生きているのを、「摘取り」、「手を加へ」、「薬を注ぎ」、試験管ではないとしても剣山に刺し貫いて、若死にさせてしまう。或いは〝紅葉狩り〟と称し、或いは〝桜の枝をかざして〟と言うと風流ですが、要するに、生木（なまき）をさいて折り取ることではないか。それも、「これを分析的にながめて、天地の秘密をそこからうかがひださうと」いう思想性はない。第一、「美には手

を触れてはいけない」のではなかったかしらん……。

しかも、論より証拠、現実問題として、日本が世界のどこよりも自然を大切にしているなどとは、当の日本人の誰もが思ってはいないのではありませんか。むしろ、全く逆で、大拙が云々するキリスト教的な欧米の方が自然を大事に保護していることは知る人ぞ知るなのです。日本の国立公園と、欧米の一般公園とを比べても、比較にならない格差ではありませんか。

また、テニスンの〈垣根の花〉に西洋底があり、そこにはキリスト教が反映されているとも言われていますが、そのテニスンの詩とは、彼の『禅と日本文化・続篇』中の「禅と日本人の自然愛㈡」に引用されている。

花は小さいが、自分が若し
その真の姿を、根から何から一切、
知りえたならば
神と人との真を知ることとならう⑥。

という詩を指すもののようです。

もっとも、まだこの『禅と日本文化』の項では、この詩は、

華厳（けごん）哲学のやうに、一と多の調和、と言ふより、主と客の融合が、自然の美的理解に取っては絶対に必要である⑦。

という好例として引用されているのであり！

土塀の割目に咲ける細やかな花の美も、たゞそれが萬物と究竟の源を同じうしているとせられる時のみ、真に味わひ得る。言ふまでもなく、これは単に哲学的乃至概念的な方法では駄目で、禅の遂げんとする方法によらなくてはならぬ。それは萬有神論の立場でも静観主義の立場でもなく、南泉及び禅一派の行ふところの『生きた』立場によらなくてはならぬ⑧。

例として引用・利用されていたのです！

したがって、テニスンの詩の味わいかたにおいて、大拙はまったく矛盾撞着しているとしなければなりません。それだけ大拙老が晩年には反動化したと言う一つの証左なり、としなければなりません。ともかくも、右の引用箇所では、彼自身、テニスンの詩に、日本人の自然愛が、そして、禅的な奥義さえも、みとめていたのですから。

### (4) 植村正久のワーズワース

もっとも、ここで彼がテニスン Alfred, Lord Tennyson（一八〇九～一八九二）を選んだのは、偶然か、それとも作為か、とも思われます。なぜなら、このビクトリア王朝に生まれた詩人テニスンは、ロマンチックな詩人で、たしかにワーズワース William Wordsworth（一七七〇～一八五〇）等の自然感に動かされましたが、自然詩人というよりも、むしろ「宇宙自然の忠実な観察者、精密な画を詩筆で描く人⑨」であったのです。キリスト教組織神学者でありつ詩人でもあった。A・H・ストロングは、テニスンについて次のような評価をくだしています。「テニスンにとっては、自然はむしろ不在の神を証しすべく巧妙にしつらえられた幻影である。自然には生命なく、ましてや神的な生命はない。神をほかにして、宇宙に存在する生命は、ただ人間の霊魂の中にのみ発見される。自然は、教え、さとす絵画もしくは象徴であって、現在する神性を啓示するものではない。私はこの自然観をテニスンの不可知論への一般的傾斜と結びつけたいと思う。この点、ワーズワースやブラウニングの両詩人が、テニスンを遥かに越えて、活き活きとした明確な信者であったと考える。この不可知論が観念論と相まって、ブラウニングよりも主観主義的となり、時

として、その観念論が、いかなる世界の真実在なることを疑わしめ、畢竟、世界は感じと思いのものでしかないように見えたのである。世界は、現在する神の直接の産物というよりも、遥るかなる神の影のようなものであった[10]」と。これを知ってか、知らずでか、大拙はテニスンをとりあげ、しかもこの反自然生命論的なテニスンに加担していたのですから皮肉と言えば皮肉です。

この際、テニスンの源流として、彼に自然感の影響を与えたビクトリア王朝最大の詩人、しかも英国の生んだ最も偉大な自然詩人、自然を生けるものとして歌い、自然への愛ゆえに、人間もその自然の一部として、人間を愛したワーズワースの詩を参照していただきたいのです。テニスン一人が西欧の詩人ではありませんし、西欧全詩人の名誉のために。たとえば、〝早春の歌〟、〝ティンタン寺より数マイル上流にて詠める詩〟、〝郭公に〟、〝虹〟、〝胡蝶に〟、〝決意と独立（水蛭取る人）〟、〝美しき夕べなり〟、〝水仙〟、〝幼年時代を追想して不死を知る頌〟、〝比いなき輝きと美との夕べに作れる〟、〝トロサックスの山道〟などなど[11]。殊に、〝決意と独立〟は、実在したスコットランドの水蛭取りの一老人を中心とする自然詩で、言うところの東洋的感興をおこさせてくることは、驚きの声をあげさせてくれましょう。

日本の文語訳聖書の詩篇は、植村正久牧師の労するところ多しと言われますが、彼は英詩をよくし、バーンズ、テニスン、ワーズワースに関する評論は、おそらく日本の英文学史上でも古典的価値を有するものと思われます[12]。その中でも、特にワーズワースに関する文章は、もっとも熱情的な傑作で、「自然界の預言者ワーズワース[13]」、「『ワーズワース集』を読む[14]」の二篇があります。その前者の中で、詩人・植村正久牧師は語ります。

慣るるという恐ろしき錆は、自然界を反映すべき吾人の心境を曇らせたり。日月も陳腐とはなりぬ。花も新鮮の色を失えり。鳥も好音を伝えず。天地は僅かに一大機関とはなりぬ。自然は風致なき割烹店のごとくただ多忙のみ、奔走のみ、混雑のみ。吾人の風流は盆卉、奇形なる石、生薑のごとき山岳を写せる墨画もしくは瓢箪を携えて酔歌する花見遊山とはなりにけり。その歌は足曳の山鳥の尾のしだりをの長々しき冠辞、枕詞のために囚えられ、その

風雅は古人の句調を学びてただ鸚鵡のごとくにわが美わしき音調を臚列するのみ。今人の風流は景樹の風流なり。甚だしきは貫之、人麿の風流なり。古語、歌格、典故は、詩人と自然界との間に一大牆壁を築き出だせり。ああ大和歌は化石と変したるにあらずや。真個の自然界の預言者起りて、アダム、エバが初めて天日を仰ぎ、楽園の花鳥を楽しめる時の風情と同様なる眼光をもって物界の光景を観、もって真実にかつ高尚にこれを吟詠するにあらざれば、いわゆるもののあわれはこれより変うることならん[15]。

とも申しているのです。

景樹、貫之、人麿の風流、行儀作法に錆びつき、跼蹐して、ついに「詩人と自然界との間に一大牆壁を築く」風潮に反対して、あのアダム、エバが初めて天日を仰いだ心の大和歌の出現を期待しているのであって、キリスト教こそ、生き生きとした自然詩歌の源泉なりとしているのです。

さらに、『ワーズワース集』を読む」の中では、西行の『山家集』を評釈し、西行が自然を以て佛意の顕現とみる態度でうたったとは言え、たとえば、

心なき身にも哀れはしられけり
鴫立つ沢の秋の夕暮

という歌と、ワーズワースの〝ウエストミンスター橋上にて〟Composed upon Westminster Bridge とを、ひきくらべて、西行の「蒼然たる暮色」は、ついに「希望と光明と怡悦とにて充つる朝気色」にしかざることを述べているのです[16]。

〈ウエストミンスター橋上にて〉
現世にかくまで美しきものはなし、
いとも気高き心うつこの光景に、

心ひかれざる人は魂の鈍れるもの。
いま、この市街は暁の美を、
衣のごとく身にまとう。
船、塔、高楼、劇場、寺院は静かにあからさまに、
遙かなる平野と空に向って開き、
すべてみな、烟なき大気の中に燦然と輝やく。
かくも美しく陽はその最初の輝やきに、
谷、岩、丘を染めなせしことはあらじ。
げに、かくも深き静けさをわれ見しことも、感ぜしこともなし。
テムス河は悠々と心のままに流れ行く。
あゝ、家々すらも眠れるごとく、
大都市の心もなお静かに眠る。
（田部重治 訳）

以上、ともかくも、キリスト教も、キリスト教徒も、大拙老漢が言われるように、朝早く朝顔の花を見るのは、美そのものを、――かくも新鮮な、かくも心を恍惚たらしめる、かくも神聖にして近寄りがたい、神秘に充ちたる、神の手より来たまゝの最初の創作品を、見ること[18]においては、いささかも異和感を有しないのであり、まさに、彼の言う通り、「神の手より来たまゝの最初の創作品」として見る者としては、その最たる者なのです。

## 第二章　友なる自然・敵なる自然

### (1)　敵対力か友人伴侶か

さらに、よく西欧文明批判の例として、〝宇宙征服〟とか、〝山岳征服〟などという表現が取沙汰されますが、御多分にもれず、大拙の「禅と日本人の自然愛(一)」の中で、とりあげられています。

われわれ東洋人は自然を敵対力という形で考へたことはこれまでなかった。反対に、自然は自分達には不断の友人・伴侶であり、この国土には屢々地震を見舞はせたが、尚ほ絶対に信頼するに足るとしてきた。征服といふ観念は忌はしい。登山に成功したら『山と仲よしになった』と何故言はないのか。征服すべき対象を探し求めるのは自然に対する東洋的態度ではない。

われわれは富士山にも登るが、その目的は富士を『征服する』のではなくて、富士の美麗・壮大・孤高に打たれるにある。五彩の雲の後ろから華やかに昇る荘厳な旭日――御来光を拝むにある。これは精神的に堕落している点は少しもないが、さりとて必ずしも太陽崇拝の行為ではない。太陽は地上生きとし生けるものの偉大な恩恵であり、人間が深い感謝と味到(まいとう)の心をもって、一切の生物非生物の恩恵者に近づくのは当然な事にすぎない。といふのは、この気持はわれわれだけ許されたもので、他の生物にはかゝる繊細な情緒を缺いているやうに思われるからである[18]。

という風に。こうした言葉の揚げ足をとらえての印象批評は、語るほどに、いよいよ好い気持になるもので、彼の最晩年の『大拙つれづれ草』でも、くりかえされています。

西洋の人たちは、何事にも征服感が先だつらしい。山へ登れば山の征服、海の底へはいれば、海の征服、なんで

もかでも、対峙的に見ようとするから、しかしてそれが自分の敵のように見られるので、それに打ち勝ってやろうと決心する。山登りの人に『どうして、そんなに危険な山の上へ登りたいという考えになったか』と尋ねると、その人いわく『何か自分の目の前に立っているものを見ると、それに登って見たくてしようがない』といったとのこと[19]。

また同じ文中、

西洋のネーチュアは、いつも人間に対蹠（たいしょ）して考えられる。それで両者の間には相剋（そうこく）的性格が出る。われ克（か）たざれば、彼のために敗られるということになっている。それゆえ、西洋では自然（ネーチュア）を征服するなどという。東洋の「自然」は人間に征服せられるものでない。人間は「自然」のもとに所在するもので、もしそれにそむくことがあれば、それは人間から仕かけたので、結局敗れるのは人間の方にある。西洋のネーチュアの二元的なるに対して、東洋の「自然」は一元的包攝性である。「自然」に打ち克つなどということは、東洋には無い考えである。「自然」には隨順すること[20]。

という風に。

(2)　つくられたるものたち

しかしながら、大拙老が語りまくるような西洋人は、はたして全西洋人の何割いることでしょうか。自然を敵対力として、敵視ばかりするような。ましてや、キリスト教そのもの、聖書そのものが自然を仇敵視するなどというとすれば、はなはだ見当ちがいなこと、と申さねばならないでしょう。聖書は自然をもって、むしろ、大拙が語るところの「不断の友人・伴侶」として、描いているのです。

まず、何よりも、人間に対する、或いは敵対する自然という一般概念を、聖書は知らないのです。――人間に対する自然といったような思想は、むしろギリシャ思想から伝えられたものではありませんか。――たとえば、聖書は人間と自然という用語ではなく、動物も植物も、虫も魚も、太陽も月も、土も水も、山も海も、みなひとしく、人間と一緒に「被造物（クリエチャーレス）」・「つくられたもの」と一括して呼んでいるのです。しかも、共に同一の創造主（クリエイター）によってつくられた仲間として。

あの、ノアの洪水の時にしても、神は、「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。」〈創世記6：7〉と、総括されていましたし、「わたしは、これらを造ったことを悔いる」とも言われているのです。そして、すでに御存知のように、ノアの箱舟の中に乗ったのは、ノアとその家族八名の人間だけでなく、動物たちもひとしく同乗したのです。そして、それは神の命令であったのです。すなわち、神はノアに語ります。

わたしは、あなたと契約を結ぼう。あなたは、あなたの息子たち、あなたの妻、それにあなたの息子たちの妻といっしょに箱舟にはいりなさい。またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹ずつ箱舟に連れてはいり、あなたといっしょに生き残るようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。また、各種類の鳥、各種類の動物、各種類の地をはうものすべてのうち、それぞれ二匹ずつが、生き残るために、あなたのところに来なければならない。あなたは、食べられるあらゆる食糧を取って、自分のところに集め、あなたとそれらの動物の食物としなさい〈創世記6：18～21〉。

そして、洪水後も同様です。

神はノアに告げて仰せられた。「あなたは、あなたの妻と、あなたの息子たちと、息子たちの妻といっしょにいる

すべての肉なるものの生き物、すなわち鳥や家畜や地をはうすべてのものを、あなたといっしょに連れ出しなさい。それらが地に群がり、地の上で生み、そしてふえるようにしなさい〈創世記8：15～17〉。

いや、これよりも前、人祖アダムがまだ一人であったとき、まだエバがつくられなかった頃、鳥や獣は、彼の助け手に擬せられたと語られているのです。

神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた〈創世記2：18～20〉。

しかし、結局、アダムはエバによって、真の助け手を見つけることになるのですが、神の意中においては、動物たちが、いかに人間と親密な間柄にあるかは、十分語られています。アダムが生き物に名をつけたこと、ノアが生き物の保護にあたったことから、聖書の中で動物園の園長になれる資格を有する人物をあげよ、と問われたら、この二名があげられる次第なのです。そして、ノアの洪水のあとで結ばれた〝ノアの契約〟は、人間とのみかわされたものではなくて、すべての生き物との間の約束だったのです。

虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。こうして神はノアに仰せられた。「これが、わたしと、地上のすべての肉なるものとの間に立てた契約のしるしである」〈創世記9：16、17〉。

と。そして、やがてキリスト再臨と共に出現する千年王国の状景にも、動物は決して忘れられておりません。むしろ、千年王国は人間と動物たちとの楽園なのです。

おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ、雌牛は熊とは食い物を共にし、牛の子と熊の子と共に伏し、しは牛のようにわらを食い、乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、乳ばなれの子は手をまむしの穴に入れる。彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない〈イザヤ11：6～9〉。

見事な被造物仲間同士の一致です。もとより、だからと言って、あの犬公方（くぼう）・綱吉将軍のような生類憐（しょうるいあわれ）みの令ではなくして、「動植物は神の光栄のために創られたが、ただそれは人間を仲介として（人間によって賞讃され、知られ、使用されることによって）十分に実現される」ものなのであり、かかるがゆえに、「動植物に対して人間が権利と同時に義務をももつ」という重要な事実も、はっきりしてくるのです。「人間は動植物を、それらの本性にしたがって利用しなければならない。あるいは、人間は動植物を『生かさ』なければならないといったほうがよいかもしれない。それ故、動物やすべての被造物に対するキリスト教的態度は、根本的に尊敬の態度なのである[21]」（ジャン・フリッシュ）。

### (3) 共にうめき共に望む

そのほか、あのローマ人への手紙8章に展開された被造物全体の運命観も、その意義たるや重大です。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服

したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしていることを知っています〈ローマ8：18～22〉。

実に聖書は、人間と全自然とを、まず〝被造物〟として把握し、共通の運命をにない、共に賛美し、共に苦しみ、共に回復の時を待望し合っているものと、一貫して見ているのです。〝山岳征服〟論的に、自然を敵対物としていると言った俗説は、そのままお返ししたいのです。聖書においては、むしろ逆なのですから。いかに、キリスト教が、自然への愛情と保護とに貢献して来たことかは、あの小川の魚や、小枝の鳥と語らったというアッシジのフランシスや、バラを賞でつつ涙したイグナチオ・ロヨラや、動物たちの無邪気な満足と喜びに、あくなき人間の欲心を反省せしめたマルチン・ルター、また、生命なき石にも様々な美しい結晶の模様を恵む神を賛めるジャン・カルヴァンと言った、生きた証人の例をあげる事ができるでしょう。近くは、内村鑑三の天然自然に寄する所感、植村正久の詩論もあげられましょう。そして、有名・無名の詩人たちによる賛美歌の歌詞も。ともかく、キリスト教の一神論は、決して自然を無視し、圧殺して、自然詩を成立せしめないものでは断じてないのです。

論より証拠、今日、むしろ自然を愛し、いつくしみ、これを国力をもって保護・保存するのは、日本か、それとも、いわゆるキリスト教的と言われる欧米諸国か。一度でも海外旅行をした人は、その軍配の去就に迷うことはありません。首都の真ん中ホワイト・ハウスの庭にもリスが遊びまわり、広場に鳩が群れても、決して驚かさない。子供たちは自然に親から感化されているのです。英国では〝王立動物虐待防止協会〟（R・S・P・C）が一八二二年に創立され、動物虐待防止法は、単なる道徳的呼びかけにとどまらず、事実、五〇ポンド以下の罰金、三ヶ月以下の禁錮刑を執行する強制権を有し、警官と同様の制服を着たインスペクターは、常時見まわり、家畜飼育業者の動物の状態を検査し、動物一頭あたりにきめられた広さの空間が確保されていない場合は、これを摘発するのです。海外旅行者の中には、むしろ自然過保護の感を受けて帰国する者も多いのです。もしも、西洋イクオールキリスト教、東洋・日本イ

クオール佛教と言った、大拙老をはじめとする日本人評論家の定式を、そのまま認めるとしたら、いったいどうなるのでしょう。

もっとも、大拙も、ついにその最晩年の著書『大拙つれづれ草』中の、「日本の再発見」で、こうもらしています。

参与の自然でなく、一体の「自然」、または一如の「自然」に親しむことのできる日本の心を再認識して、これを長く失わぬようにする。

最後に、この心を持ちうる日本人が、なぜか、生ける「自然」物――犬や猫、鳥や虫、草や木に対して、残忍の仕打ちをして、平気でいるのが、不思議でならぬ。狐を祭り蛇を祭り、老木・神木に〆縄（しめなわ）をかける日本の人々が、なぜか、日常身辺に嬉々として、とびあるく猫や犬に対して、いかにも冷酷であること、子どものいたずらを誡しめずにいること、これが不思議でならぬ[22]。

まさに、〝百日の説法も屁一つ〟と言うか、〝語るに落ちた〟と言うか。「不思議」、「不思議」の連発で事は終らせずに、身びいきの日本礼賛、外国侮蔑の態度そのものを、よく突きつめねばなりません。そして知る人ぞ知る、大拙の夫人は、大の動物愛好家で、一九二九（昭和四）年には、鎌倉に動物愛護慈悲園を建てたとのことです。その夫人こそ英国人ビアトリス女史であったことも思いいたります。

また、人間と自然との親密関係は、自然の擬人化とか、人間の擬自然化によっても測定されると思いますが、聖書が、これらの修辞に満ち満ちていることは、誰でも聖書を一読する者のみとめざるをえない事実です。

私はシャロンのサフラン、谷のゆりの花〈雅歌2：1〉

神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない〈詩62：2〉。

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。太陽は、部屋から出てくる花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。その上るのは、天の果てから、行き巡るのは、天の果て果てまで。その熱を、免れるものは何もない〈詩19：1～6〉。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます〈詩23：1、2〉。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです〈マタイ6：26〉。

野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした〈マタイ6：28、29〉。

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます〈ヨハネ15：1、2〉。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません〈ヤコブ4：14〉。

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」〈ペテロ第一1：23～25〉。

彼らは、あなたがたの愛餐のしみ（暗礁）です。恐れげもなくともに宴を張りますが、自分だけを養っている者であり、風に吹き飛ばされる、水のない雲、実を結ばない、枯れに枯れて、根こそぎにされた秋の木、自分の恥のあわをわき立たせる海の荒波、さまよう星です〈ユダ12、13〉。

以上、それこそ枚挙にいとまありません。自然の擬人化どころか、神の擬自然化の世界すら開けていることも注目されます。自然を人間に敵対するもの、征服せらるべきものとする、と言った反キリスト教論が、全くいただけないものであることは、もうよろしいでしょう。

### (4) 造化にしたがい〈芭蕉〉

なお、よく知られていることですが、あの芭蕉は、「笈の小文」において、〝造化〟という言葉を語っています。

風雅におけるもの、造化にしたがひ四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なく、おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類す。夷狄を出で、鳥獣を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり[23]。

と。

小宮豊隆は、この芭蕉の言う「造化」とは、

森羅万象の奥に位して、森羅万象をして森羅万象たらしめる、根源の活力である。それを神と呼び佛と名づけるのは、名づける者の自由であるが、然し芭蕉から言へば、この「造化」は、その神や佛をさへ生む者として、神や佛の更に奥の方に位するものとして、直観されていたもののやうである。その意味で芭蕉にとって、「造化」と「自然」とは同じものであった㉔。

と、述べています。

なるほど、それは老荘風の色合いであったとしても、芭蕉が単に「自然」と言わず、「造化」――英訳すればクリエーター、「万物を創造し、化育した神、造物主、造物者、（その意味での）天地宇宙」〈広辞苑〉――と言ったところに、やはり、単なる自然をこえた背後にある見えざるものを感じていたのではないでしょうか。とすれば、〝造化〟を信じ、〝造化〟の観点より一切万物を見るキリスト教の立場においても、この「笈の小文」は、きわめて身近に読みうるのであって、芭蕉の文章を飜案させていただくと、

キリスト教におけるもの、創造主にしたがひ四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なく、おもふ所月にあらずといふ事なし。……創造主にしたがひ創造主にかへれとなり。

とも読めるのではありませんか。賛美歌九〇番は、右の芭蕉の一文に勝るとも劣らぬ文学的香気をもって、さらに奥の奥にある造化・創造神を仰いでいます。

ここもかみの　　みくになれば、
あめつち御歌を　うたいかわし、
岩に樹々に　　空に海に、

たえなる御業ぞ　あらわれたる㉕。

決して、聖書は西洋的合理主義者風の無風流・没風雅な、自然詩の成り立つ余地のない不毛なものではありません。

(5)　日は上り、日は沈み

このほか、旧約聖書の「伝道者の書」には、有名な〝空〟観が語られています。

空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。日は上り、日は沈み、またもとの上る所に帰って行く。風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。川はみな海に流れ込むが、海は満ちることがない。川は流れ込む所に、また流れる。すべての事はものうい。人は語ることさえできない。目は見て飽きることもなく、耳は聞いて満ち足りることもない。昔あったものは、これからもあり、昔起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。「これを見よ。これは新しい。」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあったものだ……。私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。……知恵ある者は、その頭に目があるが、愚かな者はやみの中を歩く。しかし、みな、同じ結末に行き着くことを私は知った。私は心の中で言った。「私も愚かな者と同じ結末に行き着くのなら、それでは私の知恵は私に何の益になろうか。」私は心の中で語った。「これもまたむなしい。」と。……どんなに人が知恵と知識と才能をもって労苦しても、何の労苦もしなかった者に、自分の分け前を譲らなければならない。これもまた、むなしく、非常に悪いことだ。実に、日の下で骨折ったいっさいの労苦と思い煩いは、人に何になろう。その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなしい〈伝道者の書1：2～2：23〉。

人生の無常、歴史の非情を語る伝道者の語りくちは、雄大にして、単調な、大自然の反復・くりかえしの調べを背景として、いつまでも語られるのです。人は、次の鴨 長明の言葉を連想されることでしょう。

ゆく河のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたはかつきえかつむすびて、ひさしくとどまる事なし。世中にある、人と栖と又かくのごとし。たましきのみやこのうちに棟をならべ、いらかをあらそへるたかきいやしき人のすまひは世々をへてつきせぬ物なれども、是をまことかと尋ぬれば、昔しありし家はまれなり。或はこぞやけて、ことしは作り、或は大家ほろびて小家となる。すむ人も是に同じ。ところもかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中にわづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生る、ならひ、たゞ水の泡にぞ似りける。不知、うまれ死ぬる人いづかたよりきたり、いづかたへか去る。又不知、かりのやどり、たが為にか心をなやまし、なににより てか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、いはゞあさがほの露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへどもあさ日にかれぬ。或は花しぼみて露きえず。きえずといへども、夕をまつ事なし[26]。

人事の転変はなはだしき様を、まず、川の流れ、よどみに浮かぶ泡沫のイメージで、印象づけた点、「伝道者の書」と同巧異曲、いな同巧同曲と申せましょう。

もっとも、「方丈記」の最後が、

みづから心にとひていはく、よをのがれて、山林にまじはる心を、さめて、道をおこなはむとなり。しかるを汝すがたは聖人に似て心はにごりにしめり、すみかはすなはち浄名居士のあとをけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨般特が行にだにおよばず。若、これ貧賤の報のみづからなやますか、はた又妄心のいたりて狂せるか。そのとき、心更にこたふる事なし。只かたはらに舌根をやとひて不請の阿弥陀佛両三遍申て、やみぬ[27]。

という風に、閑居の隠者らしく、不徹底な無常・厭世的気分の中に一種の低徊趣味的な安慰をもって終るのに対して、「伝道の書」が、

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ（伝道者の書12：13、14）。

という風に、一転して、人格的な運命の支配者なる神に対する畏敬へと、おのれをひきしめているのは、彼我の相違として、注意しておきましょう。

また、「平家物語」の巻頭の言葉も思い出されましょうか。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ。ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の禄山、これらは皆、舊主先皇の政にも従わず、楽を極め、諫をも思ひ入れず、天下の乱れぬ事を悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにしものどもなり。近く本朝を窺ふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらは驕れる事も、猛き心も、皆とりどりなりしかども、まぢかくは六波羅の入道前の太政大臣の朝臣清盛公と申し、人の有様、伝え承るこそ、心もことばも及ばれぬ[28]。

これに対應するものとしては、何と言っても、モーセの祈祷が思い出されます。照応の便のために、同じく文語文で。

主よ、なんぢは往古より世々われらの居所にてましませり。山いまだ生りいでず、汝いまだ地と世界とをつくり給わざりしとき、永遠よりとこしへまで、なんぢは神なり。なんぢ人を塵にかへらしめて宣はく、人の子よなんぢら帰れと。なんぢの目前には千年もすでにすぐる昨日の如く、また夜間のひとゝきにおなじ、なんじこれらを大水のごとく流れ去らしめ給ふ。かれらは一夜の寝のごとく、朝にはえいづる青草のごとし。朝に生えいでてさかえ、夕には苅られて枯るゝなり。われらはなんぢの怒によりて消えうせ、汝のいきどほりによりて怖ぢまどふ。汝われらの不義をみまへに置き、われらの隠れたるつみを聖顔の光のなかにおき給へり。我等のもろもろの日はなんぢの怒によりて過ぎ去り、われらが凡ての年のつくるは一息のごとし。われらが年をふる日は七十才にすぎず、あるいは壮かにして八十才にいたらん。されど、その誇るところは、たゞ勤労とかなしみとのみ、その去りゆくこと速かにして、我等もまた飛び去れり〈詩90：1～10〉。

もっとも、この時でも、死は見えざるおかたの前における罪への審判として明確にとらえられていて、単なる無常感に尽きず、その奥にいます神を視座にとらえていることは申すまでもありません。

### (6)　空の鳥・野の百合

それに、天下周知のものとして、イエス・キリストの、あの山上の垂訓の一節を思い出してみれば、事たりることでしょう。ここでも、文語文で引用しておきましょう。

空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遥かに優るる者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。又なにゆえ衣のことを思い煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、労せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へ

ば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。……この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦労は一日にて足れり〈マタイ6：26～34〉。

ここにおいて、自然愛は、単なる自然愛として、水平的・平面的にたゆとうに止まらず、神の慈愛、神の恩恵、小雀一羽、野花一本も、もれることなき神の恵みとして、一層反響して行くのです。

しかも、この「野の百合」は、決して「摘取られ」、「手を加へ」、「力を加へ」、「薬を注ぎ」、「試験管に入れ」て、どうなるかと検査されるのではありませんでした。そのままで、野の百合は野の百合として、それこそ、それに「手を触れ」ることなく、「美」とされ、「聖」とされているのです。「栄華を極めたるソロモンだに、その服装(よそおい)この花の一つにも及(し)かざりき」とまでも！ そうです、ここには、天地創造の初め、「神その造りたるすべての物を見たまひけるに、はなはだ善かりき」〈創世記1：31〉という言葉の木霊も聞こえています。

## 第三章　人格神の恵みの世界

このようにして、大拙師の言うところの〝日本的霊性〟と、キリスト教の自然観の相違は、前者にある〝美感〟や〝同感〟が後者に欠けていることでなくして、後者には前者の〝美感〟や〝同感〟が、そのまま保有されていると共に、前者が行きついて安穏たるところ、その終点とするところから、さらにもう一つ上の、人格的な神の恵みの世界、いつくしみの世界が展開されて行くという事だったのではありませんか。

「佛教は基督教をも包含しうるが、基督教は佛教を包含しえない[29]」と言う大拙の言葉は、むしろ、逆にしてお返ししたいのです。

### (1)　「日々是好日」観

なるほど、禅の世界にも、「日々是好日」観があります。聖書に、「一日の苦労は一日にて足れり」〈マタイ6：34〉という世界があるように。しかし、「日々是好日」の方には、その心境への愉悦があるだけですが、「一日の苦労は一日にて足れり」の方には、その背後に、空の鳥一羽、野の百合一本にも注がれる人格神の慈愛、「汝らの天の父はすべてこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。……すべてこれらの物は汝らに加へらるべし。」〈マタイ6：32、33〉という、人格的存在の保障が裏うちされているのです。

また大拙師推奨の、

晴れてよし
曇りてもよし
富士の山
元の姿は変らざりけり㉚

という歌も、

われ山にむかひて目をあぐ、
わが助けはいづこよりきたるや。
わがたすけは天地(あめつち)をつくりたまへる
エホバよりきたる。〈詩121：1、2〉

という詩篇と並べくらべるとき、何とも散文的と言わざるをえません。詩人・山々そして神が、いとも幽微に響存するを見よ、です。

同じく自然詩歌として、〝万葉集〟中の、

天の海に雲の波たち月の船
星の林に漕ぎ隠る見ゆ[31]

の大きさ、面白さを賞でる者は、

巨大なる光をつくりたまへる者にかんしゃせよ、その憐憫はとこしへに絶ゆることなければなり。昼をつかさどらするために日をつくりたまへる者にかんしゃせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。夜をつかさどらするために月ともろもろの星とをつくりたまへる者にかんしゃせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり〈詩136：7～9〉。

あるいは、

エホバはもろもろの星の数をかぞへて、すべてこれに名をあたへたまふ。われらの主は大いなり、その能力もまた大いなり。その知慧はきはまりなし。エホバは柔和なるものをささへ、悪しきものを地にひきおとしたまふ。エホバに感謝してうたへ、琴にあはせてわれらの神をほめうたへ。エホバは雲をもって天をおほひ、地のために雨をそなへ、もろもろの山に草をはえしめ、くひものを獣にあたへ、また鳴く小鴉にあたへたまふ〈詩147：4～9〉。

の大きさと、滋味に同感されることでしょうし、同じく自然詠唱の名歌、

東(ひむがし)の野にかぎろひの立つ見えて
かへりみすれば月かたぶきぬ㉜

に射す暁光の清爽感と、今日の日の活動への心備えに眼光を次第に増して行く歌人の面影は、同じく露営・野宿の境涯の中で歌われた、

われ臥していね、
また目さめたり、
エホバわれを支へたまへばなり
〈詩3：5〉

の中にも、思い描かれるのであり、しかも、人麿の「かぎろひ」と「月」が、ダビデにおいては、「エホバ」、すなわち「神」となっていることは、まさに聖書詩人の独擅場でしょう。いや、流浪・漂泊の詩人ダビデが、ふと目ざめた視野には、枕頭の草葉に輝く朝露の玉と、人麿が見た「かぎろひ」と、かたぶく「月」も映っていたでしょうが、そこに湧然とわき上って来た想いは、「エホバわれを支へたまへばなり」という、人格神の恵みであったのです。

なお、日と月と言へば、そのものずばりで、

我なんぢの指のわざなる天を観(み)、なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、世人はいかなるものなれば、これを聖念(みこころ)にとめたまふや、人の子はいかなるものなれば、これを顧みたまふや〈詩8：3、4〉

として、単なる日月星辰の賛歌を越えた、その日月星辰に対する、おのれの卑小さへの屈折。そして、その卑小なる者らに対する創造主の御愛顧へと、視野は打ち開かれるのです。大自然の壮麗さが、屈しては人の子らの謙卑となり、ひるがえっては慈愛の神の賛歌と高鳴るのです。

あるいは、良寛の境地、

焚くほどは風が持てくる落葉かな

も、

あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧(かて)を食べるのも、それはむなしい。
主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。〈詩127：2〉

というソロモンの歌に包摂され、しかも、「風」の背後に、風を使者とする主なる神が見上げられているのです。

しかも、この視野は、次の詩篇において、もはやこれ以上はありえようとは思えない壮大で豊かな興趣のシンフォニーとなります。

主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、
野のすべての獣に飲ませられます。
野ろばも渇きをいやします。
そのかたわらには空の鳥が住み、
枝の間でさえずっています。

主はその高殿（たかどの）から山々に水を注ぎ、
地はあなたのみわざの実（み）によって
満ち足りています。
主は家畜のために草を、
また、人に役立つ植物を生えさせられます。
人が地から食物を得るために。
また、人の心を喜ばせるぶどう酒をも。
油によるよりも顔をつややかにするために。
また、人の心をささえる食物をも。
主の木々は満ち足りています。
主の植えたレバノンの杉の木も。
そこに、鳥は巣をかけ、
こうのとりは、もみの木をその宿としています。
高い山は野やぎのため、
岩は岩だぬきの隠れ場。

主は季節のために月を造られました。
太陽はその沈む所を知っています。
あなたがやみを定められると、夜になります。
夜には、あらゆる森の獣が動きます。
若い獅子（しし）はおのれのえじきのためにほえたけり、

神におのれの食物を求めます。
日が上ると、彼らは退いて、
自分のねぐらに横になります。
人はおのれの仕事に出て行き、
夕暮れまでその働きにつきます。

主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。
あなたは、それらをみな、
知恵をもって造っておられます。
地はあなたの造られたもので満ちています。
そこには大きく、広く広がる海があり、
その中で、はうものは数知れず、
大小の生き物もいます。
そこを船が通い、
あなたが造られたレビヤタンも、
そこで戯(たわむ)れます。
彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。
あなたが時にしたがって
食物をお与えになることを。
あなたがお与えになると、彼らは集め、
あなたが御手を開かれると、

彼らは良いもので満ち足ります。

〈詩104：10～28〉

ここには、鳥羽僧正の〝鳥獣戯画〟の世界、山水四季の文人画、屏風絵の世界が一層拡大されて楽しく展開され、バックには、サンサーンスの〝動物の謝肉祭〟すら聞こえて来ます。また、

今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らをや〈マタイ6：30〉

という、主イエス・キリストの言葉も、あわせ聞いておきましょう。

(2)　〝おかげさまで〟考

なお大拙は、「日本の再発見」の中で、次のようにも語っていました。

われらはいずれも「自然」の恵みによって、その日その日を送るのである。明白に意識の表面に出て来なくても、冥々のうちに、この感覚を、われら日本人はいずれももっているのである。「おかげさまで」という言葉は、すこぶる含蓄に富んでいる。このあたりの消息を伝えているので、少しくこれを弁ずる。

道で人に会う。いわく「君、近ごろはいかが」と。その答えはたいてい「おかげで、とにかく、やっています。」とでるであろう。「おかげで」はどんなことを意味するか。「かげ」といえば、これが実質となるものは何か。すなわち「だれ」のおかげか。「何」のおかげか。しかしてこの実質が、この人に対して、その表象たる「影像」によりて、いかなる「力」を仮し与えたか。その上、この「力」なるものが、いかにも不思議なもので、生きている一人の実質ある人間に対して、その健康と幸福とを保証してくれるのである。

このように尋ねて行くと、まださきざきに種々の問題が出る。しかし、ここでは、これで打ち切って、一口に、この「かげ」の名で通っている。その後ろにある「実質」を何かというと、究極のところは「自然」に帰るよりほかないのである。われらは、無意識ながらに、われらをその中に容(い)れている、不思議の「力」をもっている「自然」――これがあるのでわれらは、いずれも「今日」あるをうるのである。これを、四恩中の第四「衆生(しゅじょう)」の恩というのである。「衆生」は、佛教の言葉で、一切万物をその中に容れている「自然」の義にほかならぬのである。すなわちわれは「自然」の力、「自然」のおかげ、その中には、相手の友だち、その他の人間は言うに及ばず、天地の間に存在する現在、過去および未来の一切のものを含めて、それらの「力」、目に見えぬ「力」に、護持せられて、自分だけでない、われと人とともどもに、いずれもいずれも今日の生命を続けて行けるのである。単に「おかげ」といって、だれの、または何の「おかげ」とも言わぬところに、いかにもめいめいの「力」に働きかけられている、人間生活の真実相がうかがい知られるのである。ただ「おかげで」というところに、無限の意義があり、またいうにいわれぬ「ありがたさ」がかくされている。われらは普通に何の気なしに「おかげさま」を乱発するが、この日本人の心理のうちにあるもの、しかして日本人は無意識にすましているもの、これを今度は、意識の表面に持ち出して来て、再認識したいのである。

「日本の再発見」のうちに種々の発見があるだろうが、その中の最大級に大切なこの「おかげさま」を入れておきたいのである。

「おかげさま」のうらにある「ありがたさ」も、またそれに添えつけて、忘れないようにしなくてはならない。西洋人、すなわちキリスト教の人は、別れるときに「グッド・バイ」という。「神なんぢと共にあれ」の義である。日本の人は、相会うときに「おかげさまで」を、感謝の心をもって、お互いにあいさつする。西も東も、今日では、無意識中の会釈(えしゃく)であるが、その底にある深いものを忘れないようにすることだ。

日本の人は、ことにいずれもが「自然」の中に生きている事実を認識して、そこへ帰るべきである[33]。

このような禅者臭ふんぷんたる陶酔的語りは、いつまでもつづきそうですが、それはともかく、「ただ『おかげで』というところに、無限の意義があり、またいうにいわれぬ『ありがたさ』がかくされている」か、どうかは疑問であり、「『かげ』といえば、これが実質となるものは何か。すなわち『だれ』のおかげか。『何』のおかげか。しかしてこの実質が、この人に対して、その表象たる『影像』によりて、いかなる『力』を仮し与えたか。その上、この『力』なるものが、いかにも不思議なもので、生きている一人の実質ある人間に対して、その健康と幸福とを保証してくれるのである。このように尋ねて行くと、まださきざきに種々の問題が出る。しかし、ここではこれで打ち切って、一口に、この『かげ』の名で通っている、その後ろにある『実質』を何かというと、究極のところは『自然』に帰るよりほかないのである」と、語っておられますが、そこで「打ち切って」しまわずに、「究極のところは『自然』に帰るよりほかないのである」と回避して、ひとり納得せずに、その「おかげ」を恵み与えられる実在者を仰げばよいのです。念のため、クリスチャンこそは他の誰よりも、「おかげさま」を、おのれの言葉として味わいつつ、つかっているのです。季節にも、日時にも、人事のみか、全自然界の些末事にも、神のおかげを見、賛美している者なのです。

〈萬物悉く可なり〉

年は春なり、
日は朝なり、
朝は七時なり、
山側は露に輝き、
雲雀は空に舞い、
蝸牛は叢林に戯る、
神は天に在り、
此世の萬事可なり[34]。

信仰詩人ロバート・ブラウニングの詩です。

しかも、

無花果(いちじく)の樹の枝が柔かくなり葉芽(めぐ)めば、夏の近きを知る〈マタイ24：32〉。

という俳諧趣味・自然詩情の味わいが、やがて、

かくのごとく汝らもこれらのすべての事を見ば、人の子すでに近づきて門辺(かどべ)に到るを知れ〈マタイ24：33〉。

という厳粛な宗教に開けるのです。また、

なんぢらの中たれか百匹の羊を有(も)たんに、もしその一匹を失はば、九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。遂に見出さば、喜びて之を己が肩にかけ、家に帰りて其の友と隣人とを呼び集めて言はん、『我とともに喜べ、失せたる我が羊を見出せり』〈ルカ15：4～6〉。

という文字通り牧歌的な詩情、素朴(そぼく)な羊飼仲間の喜びあいの真情が、十分、十二分にうたわれたのち、

われ汝らに告ぐ、かくのごとく悔改むる一人の罪人のためには悔改の必要なき九十九人の正しき者にも勝りて天に歓喜あるべし〈ルカ15：7〉。

となって、地上の仲間同士の喜びあいに、天上の歓喜が共鳴し、羊の運命が人間自身の運命と移って、ひとしお身にしむことになる。ともかく、植物・動物・人間・神が、たがいに饗応しあうシンフォニーの世界ではありませんか！しかも、それが禅者的な、ひとりよがりの安易（あんい）さに堕さず、厳粛と感恩の美にひきしまってなのです。

(3)　〝釣瓶とらせて〟の境地

さて、まず加賀の千代女は、

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

と、うたいました。これを、大拙老漢は、いかにも禅者風に、

朝顔や釣瓶とられてもらひ水

と、よみました。しかし、キリスト者として、もう一句つけ加えさせていただけるなら、

朝顔や釣瓶とらせてもらひ水

と、させていただきましょう。

まずは、やはり、〝朝顔に〟でなく、〝朝顔や〟としましょう。そのように自分と朝顔との圓融無礙底、美が美を認識する世界は、聖書に十分うたわれているのですから。そして、次に、この朝顔も、同じ創造主の慈愛をほめたたえる被造物仲間。ならば、朝顔に釣瓶とられて、などとは言わぬ、とらせてあげましょう、私は貰い水、とうたいうる

のではありませんか。キリスト教界から第一級の自然詩人、芭蕉級の俳人、人麿や家持級の歌人が出ずる素地は洋々としてひらけているのです。キリスト教は、〝砂漠〟の宗教であり、一神論によって、自然が圧服されてしまっている、無趣味・無愛想なもの、機械的合理主義の権化、散文的自然感覚――と言った風評は、決して受けいれることができません。流行の西欧批判、殊に〝よしのずいから天井のぞく〟式なキリスト教批判や聖書批評の域を越えて、虚心に聖書そのものを今一度ひらいて読みあらためてみようではありませんか。

ここもかみの　みくになれば、
鳥の音、花の香　主をばたたえ、
あさ日、ゆう日　栄えにはえて、
そよ吹く風さえ　かみをかたる。

という交響詩。しかも、それが、

ここもかみの　みくになれば、
よこしま暫しは　ときを得とも、
主のみむねの　ややに成りて、
あめつち遂には　一つとならん[35]。

〈賛美歌九〇〉

となって、美と真と善とが融合結晶して行く世界！そして、

めぐみの露は　草木にすら
ゆたかにかかり、天つさかえ
野にも山にも　みちわたるを、
などか人のみ　罪に染みし[36]。

〈賛美歌二一四〉

と、自然の美を賞でながら、ひいては、おのれの心中をかえりみさせられて、胸をうつことによって、言われるところの〝日本的霊性〟は、どんなにか、より深く、より豊かに開拓されて行くことでしょう。日本が聖書の思想によって、神と直面することによって、もう一つの創造主・救世主の世界に開眼すること、そこに自然観・自然感は遥かなる至高（いとたか）き神へと飛翔し、人格的な暖かみをもって展開されることでしょう。

### (4)　フランシスの賛歌

終りに、小さき貧者アッシジのフランシスコが、持病と病弱に加えて、聖痕印刻の激痛の中、サンダミアノの鼠の巣窟（そうくつ）のような掘立小屋で歌った〝兄弟なる太陽の歌〟をあげて、結びといたしましょう。

こよなく高く　全能の善き主よ
賛美と栄光と誉れと
すべての祝福は　おん身のもの
いと高きおん方よ　これらはみな
おん身にのみ帰すべきもの
実に　おん身のみ名を呼ぶにふさわしいもの

この世には　ひとりもいない

おお　たたえられよ　わが主
すべての被造物によって
わけても兄弟なる太陽によって
太陽は昼をつくり
主は　かれによって　われらを照らす
かれはなんとうるわしく
なんと大いなる光輝を発していることか！
いと高きおん方よ
かれこそは　おん身のみ姿を宿す

おお　たたえられよ　わが主
姉妹なる月と無数の星とによって
おん身はそれらを天にちりばめ
光もさやかに気高くうるわしくつくられた

おお　たたえられよ　わが主
兄弟なる風によって
また　空気と雲と晴れた空と
あらゆる天候とによって

おん身は　これらの兄弟で
つくられたすべてのものを支えてくださる

おお　たたえられよ　わが主
姉妹なる水によって
水は益多く謙そんで　とうとく清らかなもの

おお　たたえられよ　わが主
兄弟なる火によって
おん身はこの兄弟で夜を照らされる
火はきわめてうるわしく
喜ばしく　力強く　たくましい

おお　たたえられよ　わが主
われらの姉妹　母なる大地によって
大地はわれらをはぐくみ　つちかい
八千草の実と
色とりどりの草と花とを生み出す

おおすべての被造物よ！
主をたたえ　祝し　感謝せよ

深くへりくだって　主に仕えよ[37]。

この古拙、この清明、この素朴、この純一さの中の、人間と、その兄弟姉妹なる自然と、そしてその共通の主なる神との交歓の図にアーメンと唱えて。

〈主暦二〇〇〇年　新春〉

〈注〉

①大島康正レポート（朝日新聞、昭和四一年七月一三日〈水〉夕刊七頁）。

②鈴木大拙「佛教の象徴主義」（『鈴木大拙選集』〈春秋社、一九五二年〉第二六巻五、一二三～一三二頁）。

③同書　一六八～一七二頁。

④鈴木大拙『禅と日本文化』（『鈴木大拙選集』〈春秋社、一九五二年〉第九巻　一一五頁）。もっとも、この書はもと英文で書かれたもので、北川桃雄氏が訳したものなのですが、もちろん大拙自身の校閲になるものです。もしも、この時、「に」でなく、「や」でなければならぬとしていたとすれば、ここは必ずや直していたと思われます。

⑤頴原退藏『俳句評釈』（角川文庫、昭和二八年）下巻、九六頁。

⑥鈴木大拙『禅と日本文化・続篇』（『鈴木大拙選集』〈春秋社、一九五二年〉第九巻　二〇二頁）。

⑦同書　二〇二頁。

⑧同書　二〇二～二〇三頁。

⑨斉藤　勇『英文学史』（研究社、一九四九年）四一一頁。

⑩A. H. Strong: “The Great Poets and Their Theology” (Griffith & Rowland), pp. 496, 497.

⑪『ワーズワース詩集』（岩波文庫、一九七四年）所載。

⑫植村正久「西洋文学論」（『植村正久著作集』〈教文館、一九六六年〉第三巻Ⅲ　一八一～三四〇頁）。

⑬同書　二〇五～二八六頁。
⑭同書　二八六～二九二頁。
⑮同書　二八一～二八二頁。
⑯同書　二九一頁。
⑰鈴木大拙『禅と日本文化』（『鈴木大拙選集』〈春秋社、一九五二年〉第九巻　一五一頁）。
⑱同書　一七八頁。
⑲鈴木大拙『大拙つれづれ草』（読売新聞社、一九六六年）〝日本の再発見〟一四五頁。
⑳同書　一三六頁。
㉑ジャン・フリッシュ「キリスト教の動物観」（雑誌『世紀』第一五六号・一九六三年五月刊）。
㉒鈴木大拙『大拙つれづれ草』（読売新聞社、一九六六年）「日本の再発見」一四七頁。
㉓松尾芭蕉「笈の小文」（『日本古典文学大系』第四六巻（岩波書店、一九七八年）五二頁。
㉔小宮豊隆『芭蕉・世阿陀・秘伝・勘』（白日書院、一九四七年）一三頁。
㉕賛美歌九〇番。Maltbie Davenport Babcock.
㉖鴨　長明『方丈記』（『新日本古典文学大系』〈岩波書店、一九八九年〉第三九巻　一七～一八頁。
㉗同書　七三～七四頁。
㉘『平家物語』巻一（『新日本古典文学大系』〈岩波書店、一九九一年〉第四四巻）「祇園精舎の事」。
㉙鈴木大拙「基督教と佛教」（『鈴木大拙選集』〈春秋社、一九五二年〉第二六巻　一七〇頁。
㉚鈴木大拙「禅と日本人の自然愛㈠」（『鈴木大拙選集』〈春秋社、一九五二年〉第九巻　一七七頁。
㉛『萬葉集』（『日本古典文学大系』〈岩波書店、一九七八年〉第四巻）第七、一〇六八番歌。
㉜『萬葉集』（同書、一九七七年、第二巻）第一、四八番歌。
㉝鈴木大拙『大拙つれづれ草』（読売新聞社、一九六六年）「日本の再発見」一三九～一四二頁。

㉞『内村鑑三全集』（岩波書店、一九三二年）第一二巻　七三一頁。

㉟賛美歌九〇番。Maltbie Davenport Babcock.

㊱賛美歌二一四番。Reginald Heber.

㊲オ・エングルベール『アシジの聖フランシスコ』Omer Englebert “Vie de Saint François d’ Assise 平井篤子訳（創文社、一九六九年）二七五～二七八頁。なお、賛美歌七五番は、本詩に基づくもの。

[Abstract in English]

# God and Nature
## — The Problem of the Oriental and Western Views of Nature —

S. Obata

A famous *haiku* by Kaga-no-Chiyojyo goes as follows:

A morning glory,
blooming around the well bucket,
made me ask to draw water from the neighbor's.

This essay critiques Daisetsu Susuki who, taking issues from this haiku, argues for Buddhism in comparison to Christianity.

Daisetsu argues that in Buddhism it is prohibited to touch the beauty, whereas in Christianity one picks up a flower, arranges it, pours chemicals on it, and examines it in a test tube. This view is criticized by referring to Masahisa Uemura who compares Saigyo with William Wordsworth.

When discussing the expressions such as to conquer the universe or a mountain, Daisetsu remarks that nature in the West is always understood as confronting the humans, which creates a conquer-or-be-conquered relationship between them. On the contrary, however, the Biblical view of nature is that it, along with us humans, is created by God, and suffers with us and co-exists with us. In addition, it has to be noted that there have been numerous preserve-the-nature movements in the West which was started by Christianity historically, embodied for example in the Royal Society for Prevention of Cruelty to Animals (RSPCA) of the UK and in the punishments on offenders including fines and imprisonment.

The Japanese sense of and sympathy toward beauty, which Daisetsu intends to praise, are exemplified in the Biblical view of nature which is expressed in the anthropomorphism of nature, the nature-morphism of humans and God. Further the Bible also presents the view of nature that is richly sustained by the love of the personal God. The essay ends with a quotation from Francis of Assisi.

〔日本語要約〕

# 神と自然
## ―― 自然をめぐる東洋と西洋の問題 ――

小　畑　　進

加賀の千代女の俳句『朝顔や釣瓶とられて貰ひ水』を話題に，「鈴木大拙」がくりひろげて行く基督教と佛教比較論を検証する。

佛教では「美に手を触れてはいけない」のに対して，キリスト教は花を見れば「摘取り」・「手を加へ」・「薬を注ぎ」・「試験管に入れ」てしまうと云った大拙の云い分をとり上げ，植村正久の西行・ワーズワース比較論を参照する。

また，「宇宙征服」・「山岳征服」といった表現について，「西洋のネーチュアはいつも人間に対蹠して考えられる。それで両者の間には相剋的性格が出る」という大拙の所論に対して，聖書の自然観は，人間と共に「つくられたもの」，人間と共に苦しむ仲間であり，共生の世界があること。そして，キリスト教西洋の自然保護の現状，英国の王立動物虐待防止協会（R･S･P･C･A）の存在，罰金・禁錮刑の強制権行使を紹介する。

さらには，聖書に満ち溢れる自然の擬人化・人間の擬自然化・神の擬自然化を例証して，言うところの「日本的霊性」の美感・同感はそのまま聖書の自然観に保有され，そのうえ人格的な神の慈愛の世界が優渥に展開していることを明らかにする。結びは，アッシジのフランシスコの「兄弟なる太陽の歌」。